

京まち工房



F A L L
情報交流誌

no.

24

(財)京都市景観・まちづくりセンター ニュースレター

パートナーシップで進めるまちづくり

まちづくりの充実に向け、 一歩一歩!

~おこしやす! まちセン~



平成15年6月に「ひと・まち交流館 京都」(河原町五条下る東側)がオープンして3ヶ月。たくさんの方が景観・まちづくりセンターに来られました。まちづくり活動団体の方や学生さん、夏休み中の小学生や親子連れ。新しい出会いも生まれています。「ひと・まち交流館 京都」の他のセンターに来られたその足で、景観・まちづくりセンターへ相談に来られた方もいらっしゃいました。

「景観・まちづくり大学」の各セミナーも多くの方にぎわっています。「まちづくり史セミナー」を受講された方からは、「2時間ではとても足りない」、「よい勉強になった」と反

響も上々です。

机とイスが置いてあり、待ち合わせや簡単な打ち合わせ空間として誰でも使うことのできる「まちづくり交流サロン」では、図書コーナーで借りてきた本を読みふけておられる方や、打ち合わせをされている方がいらっしゃいます。

秋以降も、「景観・まちづくり大学」の各セミナーや4年ぶりに開催している「第2回景観・まちづくりコンクール」、平成16年2月に開催予定の「第2回 京都まちづくり交流博」など、様々な企画が目白押しです。

これからのセンターの取組にご注目ください。

あなたのまちづくり拝見

四条繁栄会商店街における 地区計画策定の取組

住民主体のまちづくりを様々な視点から紹介するこのコーナー。

今回は、地域経済の活性化や京都らしい風格あるまちづくりを目指し、様々な活動が行われている四条繁栄会商店街の地区計画策定の取組を紹介します。



四条繁栄会商店街(四条通を東の方向にみる)

四条繁栄会商店街の歴史

京都有数の商店街である四条繁栄会商店街。その歴史は古く、大正時代に協同組合として発足したのがその始まりとされています。

その後、昭和44年に任意組合から法人組織に改組し、振興組合(法人)として現在の商店街の姿になりました。

四条繁栄会商店街は、その歴史もさることながら、商店街の役員の方々が、商店街制度を学ぶために海外へ赴くなど、先進的な取組を行う面でも、京都をリードする商店街だといえます。

四条繁栄会商店街振興組合の活動について

四条繁栄会商店街振興組合では、総務委員会をはじめとして9つの委員会を中心となり、商店街の様々な課題に取り組まれています。お客様が安心して、また、満足して買い物ができる商店街を目指して、各商店が満足度を高めるための努力を行う一方で、快適に買い物ができる環境整備と品格と賑わいのあるまちづくり、更には交通環境や、安全施策、防犯等その活動は多岐にわたっています。

【各構成委員会】

- ・ 総務委員会
- ・ (環境整備) 事業委員会
- ・ 会計委員会
- ・ 金融委員会
- ・ 販売促進(特)委員会
- ・ 情報化システム(特)委員会
- ・ 街づくり(特)委員会
- ・ 地区計画(特)委員会
- ・ 防犯カメラ対策(特)委員会

平成14年度では、警察と連携した暴走族追放の夜間パレードへの参加や、アーケードやカラー舗道・防護柵といった商店街の関連施設の維持・管理など、特に地域住民や買い物に来られた方の安全・環境対策に重点が置かれています。また、祇園祭における長刀鉾の曳手に組合員が参加するなど地域行事への協力も積極的に行っておられます。

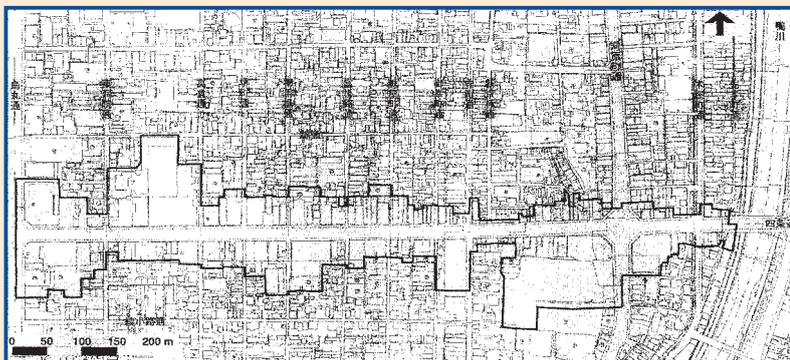
地区計画の策定に向けて

四条繁栄会商店街振興組合の設立時には、商店街における環境のあり方を示した「四条繁栄会商店街環境整備規定」を、更に平成12年度には商店街の憲法ともいえる「基本理念」を策定され、新しさ、伝統、独自性を重視した商店街集団として、風格あるストリートに向けた沿道環境整備に努められています。

しかし、景気の低迷や地価の下落など最近の経済情勢を反映し、京都の都心部では、土地利用の転換や建造物の用途変更が急激に進行し、四条通沿道においても、基本理念に相応しくない建築物や業種が出現することが懸念される事態になってきました。このような状況を受け、「風格と華やぎ」があり「京都を代表する商店街」として、「伝統と革新の調和する個性豊かな商店」の立地を誘導し、「良質な環境と景観」を有する都市空間の形成を目指すため、京都市に地区計画の指定に関する要望を行いました。

地区計画の内容は、四条大橋西詰から烏丸通までの約1

地区計画の区域を示した図面



注) 敷地の一部でも当該範囲に該当する場合は、建物用途制限の対象となります。

「四条通沿道における地区計画策定 要望書」

- 地区計画の名称：四条通地区地区計画
- 地区計画の策定区域：京都市中京区並びに下京区の四条通沿道(立売西町・立売東町・笋町・長刀鉾町・阪東屋町・西魚屋町・帯屋町・立売中之町・瀬戸屋町・西大文字町・樹屋町・奈良物町・東大文字町・御旅宮本町・中之町・御旅町・米屋町・真町・橋本町・柏屋町・水銀屋町・元恵王子町・高材木町・小石町・相之町・徳正寺町・大寿町・貞安前之町・順風町・稻荷町・船頭町・斎藤町の一部)
- 地区整備計画：
 - ・ 建築物等の用途の制限
 - ・ 建築物の形態又は意匠制限

■経過

- ・ 平成14年 9月：地区計画特別委員会発足
- ・ 平成14年11月：臨時総会(四条通地区計画(案)の説明と承認)
- ・ 平成15年 2月：権利者説明会の開催
- ・ 平成15年 3月：地元要望書を京都市へ提出
- ・ 平成15年 7月：京都市都市計画審議会で承認

基本理念

四条繁栄会は新しさと伝統に加え独自性を重視する商店街を目指す。

また世界の「きょうと」、しかもその中心商店街としての認識と誇りを強く持ち、「風格」あるストリートとしての環境整備を常に心がけ、それにふさわしい構造、空間、店舗の姿、魅力ある商店機能・情報発信力をもつ「まち」とする。

キロ、127ヘクタールで、カラオケ店や馬券売場、キャバレーなどの風俗店（パチンコ・マージャン店を除く）を禁止する用途規制や、共同住宅の建築時には、四条通から20メートルの後退などを義務付けるものです。

地区計画制度を選択された理由は、規制対象地域のすべての地権者が、法的な拘束力を受けるため、地域としてのまとまりを保つことができると判断されたからです。

法的な拘束力を受けることについて、地権者との合意形成に苦慮されたのではないですかと理事長の高橋亮太郎さんにお聞きしたところ、「商店街の歴史が物語るように、この地域のほとんどの商店主には、この商店街がどうあるべきかという共通認識ができています。だから、大抵の場合、十分説明すれば理解していただける」とのお答えでした。

京都市内では、東山区の祇園町南側地区のように、地域が主体となって地区計画を策定した例はありますが、今回のように商店街が主導的な役割を果たしたのははじめてで、地区計画を進める過程で、行政にサポートしていただいたことに対して感謝の意を述べられていました。

お話を聞きする中で、商店主の方々が、自分のまちに責任と誇りをもって日々活動されていることを強く感じました。



京都市へ地区計画の指定に関する要望書を提出

他地域との交流

同組合では、現在、ITシステムによる他地域との連携

強化や地域間協力による中心市街地活性化対策を推進されています。

平成15年度も、暴走行為の撲滅など他の商店街と協力・連携して、交通環境や安全・環境施策の充実を図るとともに、いけばな展など関係商店街との共催イベントを実施し、様々な協力関係による地域の活性化を推進しています。

今後のまちづくり活動について

最後に、今後の商店街の目指す方向等について、お伺いしました。

「次のステップとしては、都市空間を形成する景観の問題について考えていく必要があると思っています。これから、みんなで議論していく必要がありますが、商店街の基本理念を尊重し、京都を代表する風格のあるストリートを目指していきたい。既存の建物とのかねあいもあり、すぐに新しい景観を形成することは難しいですが、長期間かけて、基本理念に沿ったまちづくりを続けていきたい」ということでした。

まちづくりの歴史は、これからまだまだ続き、今後更なるまちの発展が期待できそうです。



四条繁栄会商店街振興組合 理事長 高橋亮太郎さん

(注)地区計画：良好な市街地環境を形成するため、特定の地区を指定し、土地利用や建築物の規制、誘導を図る都市計画の制度

京のまちの今昔物語

撮影場所：中京区津軽町・押西洞院町（城巽学区）



中京区津軽町にある高松神明神社（姉小路通釜座東入）の境内に集まった子どもたち。昭和7年。



津軽町には町の子どもによる少年勤皇隊がありました。病院への慰問や鞍馬神社への奉納などの活動をしていました。昭和13年頃。



21世紀になり、秋に行われている五彩の茶会。押西洞院町の御金神社（西洞院通押小路下る）の境内ではフリーマーケットとともに金魚すくいや輪投げで楽しみました。平成14年。

「京のまちの今昔物語」では、昔の写真から、現在の京都について考えることができたいと思います。皆さんのお宅のアルバムに、かつての京都をしのぶ古い写真がありましたら、是非お貸しください。

お知恵拝借～

『からほり倶楽部 —空堀商店街界隈長屋再生プロジェクト—』

～大阪・空堀商店街界隈のまちづくり～

今回は、大阪市内の中心部にありながら、情緒と歴史のあるまちなみが残る貴重なまち、空堀商店街界隈で活動を行っている「からほり倶楽部」からお知恵を拝借します。

魅力あふれるまち「空堀」

空堀商店街は松屋町筋から東に1キロほど続く商店街で、多くの人々が訪れる活気あふれるまちです。大阪の繁華街や官庁街からは離れ、戦災からも免れ市街地にぽつんと昔の姿のまま残された、路地と長屋等の情緒のあふれる風景。それが、空堀です。

市街地にあり、周囲にも開かれ、多世代が触れ合えるまちづくりの場、そんな空堀商店街界隈を訪ねました。

「からほり倶楽部」

—空堀商店街界隈長屋再生プロジェクト—

空堀で活動されている多くのまちづくり団体のひとつ、「からほり倶楽部」の代表、六波羅雅一さんにお話を伺いました。

六波羅さんはもともとこの地域の出身というわけではなく、このまちの雰囲気にはひかれた外部の人間の一人でした。散策するうち、取り壊しや開発などにより、魅力にあふれる風景が失われていくのを多く見してきました。

「地域の人にもまちの魅力を知ってほしい。古くからこの地域にお住まいの方にとって、この空堀商店街界隈が魅力あるまちだと再認識する



からほり倶楽部と長屋再生複合ショップ「練」の皆さん

きっかけになれば」。そんな六波羅さんと、その思いに同感した方々の熱意が「からほり倶楽部」を立ち上げました。

ここでは「新旧の共生」をテーマに活動を行っています。平成13年には「空堀商店街界隈長屋再生プロジェクト」を発足させ、以来、取り壊し寸前だった長屋を複合ショップとして再生する「長屋再生」や「まち歩きワークショップ」などの活動を行いました。また、写真やオブジェ、陶芸、絵画などメンバーの作品を空堀商店街の店先や路地に展示した「からほりまちアート」、手づくりケーキや野菜、写真の販売を行う「からほりファーマーズマーケット」などのイベントを通じ、まちの内外から多くの人を集める仕掛けを展開してきました。また、「長屋再生」によって作られた複合ショップのなかに、一時的に店舗スペースを貸す「チャレンジショップ」など、新しく商売を始めたいという方々にも門戸を開いています。

「からほり倶楽部」は活動拠点を、商店街の通り沿いではなく、あえて少し離れた通りに置いています。「人が集合体となって生じる『力』、『勢い』を借り、点と点をつないで面を作りたいと考えています」と六波羅さん。

現在の課題は、比較的新しくこの地域に入ってこられたマンションにお住まいの方と地域住民のふれあいを含めた地域コミュニティの促進です。「からほり倶楽部」は、マンション敷地内での造園ワークショップイベントなどを開催し、マンション住民と地域住民とのコミュニケーションを図っています。



空堀商店街

これからの空堀

もともとまちなかの商店街は、ものを売るだけでなく、集まる人のコミュニケーションの場としての役割も果たしてきました。

現代では地域社会が崩壊し、煩わしい人間関係は敬遠されるといわれますが、人は他人と出会い認め合う温もりを求めています。

空堀商店街界隈の空間には、「からほり倶楽部」の参加者と同じ二十代から四十代の人が集まってきています。そこにあるのは、今は失われた温もりある共同体への憧憬なのでしょうか。

ここでは、場所の力の回復・再創造を目指し、周りの住民とも一緒に、多世代の交流を実現させようとしています。

いろいろな人が集まり、まちづくりを考えながら、出会いと交流の場が作り上げられていく。空堀商店街界隈は、そんな場となっているのではないのでしょうか。

*からほりくら倶楽部
—空堀商店街界隈長屋再生プロジェクト—
<http://members.aol.com/Karahori01/nagaya.htm>

京町家の保全・再生の事例

～不便さを通じて 体感する京の風情と四季～

ぬのや
布屋 (上京区)



午後の日差しが西へ傾き、障子越しに格子の影が土間に伸びる頃、暖簾を揺らして夕暮れの風が店内を涼やかに渡っていきます。「布屋」は平成15年7月にオープンしたカフェと民宿のお店です。かつてホテルに勤務されていたご主人が、両親との同居を契機に、自宅で何かできることはないかと考えた結果、自宅を住宅兼店舗として活用する方向で改修を行うことを決断されました。

改修前の建物は、築120年の京町家ですが、表はモルタルの看板建築になっていました。昭和40年代に一度改修が行われましたが、今回の改修時点では、構造や屋根など、傷んでいた箇所が多かったそうです。当初は改修できるのかどうかもわからなかったようですが、当センターの京町家専門相談を経て、京町家作事組と出会い、さらに情報収集やセミナー・見学会への参加を通じて改修へ踏み切られました。

改修に当たっては看板建築をやめ、アルミサッシから出格子のついた外観に、そして台所を元の土間に戻すなど、京町家としての風情や雰囲気を取り戻し、京町家の雰囲気をゆったりと感じてもらえる店舗にすることを基本方針に改修を進められました。同時に、家族で生活する場としてもきちんと機能する職住共存の京町家として再生することも大事な要素でした。

改修作業は京町家作事組に依頼して、平成14年9月に始まりしました。表の看板建築の部分はずし、屋根瓦を下ろし、構造の歪みを直すところから始まりました。解体が始まって骨組だけになったときはどうなることかと心配されたそうですが、職人さんといろいろ話をしながら進めていくにつれ、改修のイメージ、今後のイメージが膨らんでいったとのことでした。改修作業には瓦屋さん、左官さん、大工さん、洗い屋さんなど多くの職人さんが関わられました。どの職人さんも、長年の経験を積ん



でこられた方々ばかりで、それぞれがこだわりをもって仕事を進められ、時には職人さんの間で意見が対立することもあったそうですが、そういったやり取りの中から、ご主人は職人さんたちの仕事にける意気込みを感じられたとのことでした。今は使われなくなった井戸を埋める際には、井戸の神様が息ができるように竹を通してあげるということを大工さんから教わったときは、家の造作のしきたりのようなものを感じてとても新鮮だったとのことでした。

改修作業は、「イガミ突き」^(注2)、「洗い」などの伝統的な手法にのっとって進められていきました。また、自宅の解体で出た材料の再利用とともに、工務店さんが持っておられた古材を活用させていただいたそうです。更に、建具は蔵にしまわれていたものの再利用に加え、骨董市などで家に合うものを求められたそうです。

建物の改修は、平成15年3月に完成し、その後は引越し、カフェと民宿のオープンに向けての準備が進められました。碇子や電灯、水屋などを骨董市で探し、職人さんの洗いの作業を観察し、見よう見まねで自分たちで板を洗うなど、改修の最後は自分たちの手で仕上げられていきました。

まだオープンして間もないのですが、気に入って何度も訪れてくれるお客さんも増えてきているそうです。テレビも電話もなく、ホテルのような機能性はない不便な空間だけれども、ゆったりと自然の風を感じて時を過ごす、そんな場として利用してほしい



とご主人はおっしゃいます。京都の夏の蒸し暑さ、冬の底冷えも含めて、京町家を通じて京都の四季を体感してもらいたい

い、また、京町家の保全・再生には、やはり住みながら商売をする、というかたちがふさわしいのではないかと話しておられました。

こんなご主人の京町家に対する思いや改修作業の様子は、ホームページ (<http://www.nunoya.net>) から伺うことができます。

(注1) 平成11年4月に設立された、京町家の保全・再生を実践する団体。工務店、設計者など多くの技術者によって構成される。

(注2) てこやジャッキを使って建物を持ち上げ(揚げ前)、棒で押ししたり縄で引っ張ったりしながら柱を垂直に直していく作業。

「ひと・まち交流館 京都」オープニング記念

景観・まちづくりフォーラム 22世紀の「まちづくり史」とは!?

1200年の歴史を持つ京都で、住民の自主・自立の活動の中で培われた知恵や工夫を、これからの100年を見据え、現代のまちづくりにつなげることを目的に、景観・まちづくりフォーラム『22世紀の「まちづくり史」とは!?!』を開催しました。



「まちづくり史」とは!?

センターでは、住民の自主・自立の活動の変遷を「まちづくり史」ととらえ、平成13年から2年間、「京都のまちづくり史調査研究委員会」を設置して検討を重ねてきました。

基調講演では、この委員会の委員長をしていただいた高橋先生に、「まちづくり史」とは何かについて、全体を概観する話をさせていただきました。

「まちづくり史」は、土地・地域・コミュニティに根ざした住民の自主・自立の活動の変遷を記録したものと定義しています。「都市計画史」と似ているようですが、これは、行政や自治体、計画者から見た歴史であり、住民の視点から見た「まちづくり史」とは対極的な考え方だといえます。しかし、両者は密接な関係にあり、最近では住民の考えているまちづくりを行政等が取り込んで実施することもあり、両者の関係は随分近くなってきました。22世紀から21世紀を見たときには、「まちづくり史」＝「都市計画史」ということになっていればと思います」とお話しされました。

これからの「まちづくり史」へのヒント

パネルディスカッションでは、「ま

ちづくりの歴史の研究の立場、「現代のまちづくりの研究の立場」、「まちづくり活動の実践の立場」からそれぞれパネラーをお招きして意見交換しました。

実践の立場からは、「新しく移り住んで来られた方に地域について知ってもらい、一緒

に活動するためには、自分たちの方から理解してもらう努力をしないとイケないと思います」というお話や、平成15年3月に、学区民のまちづくりへの思いや目標をまとめられた「まちづくりのしおり」をご紹介いただきました。また、「遊び心で楽しいことをしています。それが結果的にまちづくりにつながっています」と、23年間、活動が続いている秘訣もお話いただきました。

歴史の立場からは、「京都では、町組の組織を引き継いで、学区としてのまとまりが強いです。近代化を進めるための事業はなかなか進みませんでした。が、コミュニティがしっかりしているため、一度やると決めたことにはまち全体で取り組める基盤がありました」というお話がありました。

「京都の一部の町衆のパワーはすごいと思うが、全体で見ると昔の方がレベルが高かったのでは」という問いかけに対し、「昔は持家層の権利が強くて、借家層の権利が弱いという実態がありました」と答えられました。また、「良くも悪くも地域に引き継がれてきた伝統や人間関係などはこれまで否定的にとられる場合もありましたが、そのポジティブな部分を見直し、関わ

りを楽しむことが大切ではないでしょうか」というお話もありました。

最後に、「中世から近代にかけて大きな転換期があったように、現代もまた大きな転換期を迎えているといえるでしょう。既存の組織にこだわらないで進めればよいと思いますが、今日のお話から、まちづくりの新しい局面を迎えている今、既存の組織がうまく生かされ始めていると感じました」というお話がありました。

市民がつくる「まちづくり史」

今回のフォーラムを通じて、22世紀の「まちづくり史」を展望したとき、現代を生きる私たちは、今後の「まちづくり史」を築く主人公として、どのようにまちづくりに取り組んでいくかを考えるヒントがたくさん出されました。そのヒントを共有するためにも、会場の参加者から「このフォーラムのパート2をしてほしい」という期待も寄せられました。

「ひと・まち交流館 京都」の1階には、「まちづくり史」をパネルや模型を使って分かりやすく紹介した展示コーナー「京のまちかど」があります。また、センターでは、「まちづくり史」をより深く知るため、「京のまちづくり史」セミナーも開催していますので、こちらにもお越しください。（「京のまちづくり史」セミナーについては、ホームページでも紹介しています。）

プログラム

日時：平成15年7月6日（日）午後2時～午後5時
場所：景観・まちづくりセンター地下1階ワークショップルーム

内容：

(1) 基調講演

「京都のまちづくり史を概観する」

講師：高橋康夫氏（京大大学院教授）

(2) パネルディスカッション

コーディネーター：乾 亨氏（立命館大学教授）

パネラー：

- ① まちづくりの歴史の研究から
高橋康夫氏（京大大学院教授）
中川 理氏（京都工芸繊維大学教授）
- ② 現代のまちづくりの研究から
高田光雄氏（京大大学院教授）
リムボン氏（立命館大学教授）
- ③ まちづくり活動の実践から
西嶋直和氏（本能まちづくり委員会委員長（京都市中京区））
松村長二郎氏（平野郷HOPEゾーン協議会会長（大阪市平野区））

『まちづくり交流』

京都三条ラジオカフェ

今年3月末、NPO京都コミュニティ放送が開局した「京都三条ラジオカフェ」。

京都の都心コミュニティの活性化を目指した取組をご紹介します。

地域のラジオ局を目指して

「ラジオカフェ」という名前を聞くと、ラジオ？カフェ？いったいどっち？という声が聞こえてきそうですが、正体は「コミュニティ放送」と位置付けられたFMラジオ局です。コミュニティ放送は平成4年の放送法の改正で認められ、地域の特色を生かした番組、地域住民の参加する番組、急を要するきめ細かな情報などを提供することで、地域情報の発信拠点として期待されています。なかでも阪神・淡路大震災後に、神戸市長田区のコミュニティ放送「FMわいわい」による地域情報を流す取組が注目されたように、地域に密着したラジオの重要性が理解されるようになり、広がってきました。

設立からたずさわっている理事のお一人、福井文雄ふくいぶんおさんに、ラジオカフェ開局の理由などをお聞きしました。「私たちが目指すのは市民による市民のための放送局です。自分たちが情報を発信する場合、フリーペーパーなど紙の媒体による発信力は80～90年代にかけて飛躍的に向上しましたが、音・映像による発信はこれからです。一般の放送局では、スポンサーがお金を出し、番組は放送局が作りますが、値段がとても高くなり、市民が発信する道具としては敷居が高い状況です。そこで気軽に利用できるように、市民が支えるコミュニティ放送局を考えました」。



カフェ入口



カフェはオープンスタジオに変身します

日本初のNPOによるラジオ局

「市民がみんなで支える」放送局とするために、NPOという運営形態を採用しましたが、最初は株式会社でないNPOが放送局を運営することが監督官庁である当時の郵政省には理解されなかったそうです。しかし地域のラジオをつくらうという賛同者はどんどん集まり、平成13年9月



スタジオ写真

に「NPO京都コミュニティ放送」が誕生し、平成15年3月末、日本初のNPOによるラジオ局「京都三条ラジオカフェ」が開局しました。

運営は、市民が正会員や賛助会員となり放送局の財政基盤を支え、番組制作も市民が番組会員という放送局の一員となって進めています。週1回3分間の番組を放送するには、月5千円で可能なので、大学のゼミでお金を出し合っている例もあります。まちづくりに関連した番組では、土曜日午後1時からの「ウォーキングカフェ」。歩いて暮らせる京都都心のまちづくりを考える専門家とボランティアのレポーターチームが、まちなかを歩きながら出会った人たちやお店にインタビューするという内容です。また、土曜日の午後3時からは「きょうと人・まち・であいもん」。京都府建築士会まちづくり委員会のメンバーが制作する、楽しみながら建築士と市民がともにまちづくりを考える番組です。他にも地域の老舗店主が情報を提供するなど、現在40～50チームが参加し、バラエティに富んだ番組を制作しています。

地域のコミュニケーションを深めたい

人々の憩いの場、情報の交換の場として、それぞれの人の生活スタイルに合わせた語らいの場となっているカフェ。「京都三条ラジオカフェ」という名前には、そんなコミュニケーションの場をラジオ放送で作りたいたいという思いが込められています。スタジオは、三条御幸町にある旧毎日新聞京都支社ビルの一角。貴重な近代建築として大切に使用していきたいという多くの人の思いが集まった建物で、ギャラリーや小劇場など文化・情報の拠点となっています。福井さんは、スタジオに隣接して「ラジオカフェ」という実際のカフェも運営し、より一層コミュニケーションが図れる仕掛けをつくっています。

これから

NPOの運営するラジオ局が、どのようになっていくのか、取組は始まったばかりです。みんなが気軽に発信できる場が京都のまちなかに生まれました。

ラジオのダイヤルを79.7MHzに合わせてみると、発信したい人たちの、様々な思いが伝わってくるはず。さあ、今度はあなたが発信してはいかがでしょうか！

*京都三条ラジオカフェ FM79.7MHz
http://www.radiocafe.jp/

まちづくり提案

地域活性化同好会 「バイタル伏見」の取組

地域活性化同好会「バイタル伏見」は、京都中小企業家同友会の伏見支部を母体として「地域密着」をキーワードに活動をしています。最近では、総合学習におけるNIE (Newspaper in Education) 活動への協力や、高齢者を対象としたコミュニティー・ビジネスの可能性の模索など、幅広い活動を展開しています。その「バイタル伏見」の活動内容と今後の目標などについて紹介します。

「バイタル伏見」の活動

地域活性化同好会「バイタル伏見」は、地域に根ざした中小企業のあり方を模索し、地域の活性化を目指して、平成14年4月に立ち上がりました。活動は月1回の定例会を基本に、10数名のメンバーで進めています。「バイタル伏見」は、長期目標に「伏見インクライン (疏水) の活性化」、中期目標に「伏見区内の中学校での総合学習への参加」、短期目標に「地域コミュニティーとビジネス」の活動目標を掲げています。

1 伏見インクライン (疏水) の活性化

長期目標の活動では、伏見区の旧市街地を流れる琵琶湖疏水を地域の活性化に役立てたいと考え、情報収集をはじめ、研究家との意見交換や疏水ウォーキングなどを行ってきました。昔はこの疏水も生活に密着した空間だったのですが、現在は金網に閉ざされ異質な空間になっています。この疏水が、親しみやすい、生活に潤いを与える川になってほしいという思いから、今後の活用の方法を模索しています。

2 伏見区内の中学校での総合学習への参加

中期目標の活動では、現在、伏見中学校の総合学習に積極的に関わっています。平成14年度は、「バイタル伏見」から伏見中学校に働き掛け、総合学習の時間を利用した「社会人講師講座」を開催することになりました。この「社会人講師講座」は「バイタル伏見」から派遣された中小企業の経営者が講師となって授業を行うものです。平成15年度から



「社会人講師講座」

は、伏見中学校との関わりで生まれた信頼関係により、同中学校のNIE活動に関わることになりました。そのNIE活動の一環として、1年生が生徒自身で企業の取材を行い、広告の作成を行う「豆記者体験」も行われました。「バイタル伏見」は、60事業所に対してNIE活動への協力の呼び掛けと学校との調整を行い、企業と学校との橋渡しをされています。

3 地域コミュニティーとビジネス

短期目標では、地域と共生したビジネスとして、高齢者に関わるデイサービスの展開を考えています。平成15年5月には、大阪の長屋を再生した「デイサービス陽だまり」を訪問し、施設の見学会を行いました。その後、伏見区の納屋町商店街などと情報交換を行い、デイサービスの拠点をつくるよう検討を行ってきました。今後も社会福祉協議会などと情報交換を行いながら、それぞれの会社で培ってきた経営資源をもとに、検討を進めていきます。

今後の活動への思い

今後の活動で生かしたいことを、「バイタル伏見」の世話人中村悦子

さん (代表)、高桑暉英さんにお聞きしました。一つは、「企業を退職された方々は、様々な経験や能力など非常に貴重な財産を持たれているので、この財産を学校や他の企業で活用していくことです。その橋渡しの役割を「バイタル伏見」で担えたら」と話されました。もう一つは、自分たちが生まれ育ったまちを、子どもが気軽にあいざつできるような豊かなまちにしていきたいという思いです。京都で住み続け、生活し、商売をしてきた中で、「京都」という名前や環境に助けられた部分がたくさんあり、お二人ともお世話になった地域に何か還元したいという思いを持っておられます。この思いが、現在の「バイタル伏見」の活動につながっているのではないかと思います。

地域に根付いた活動を進めてきた「バイタル伏見」の取組が、今後も更に広がりを見せ、豊かなまちづくりにつながっていくことを願っています。



左から中村さん(代表)・高桑さん

(注) NIE (Newspaper in Education) とは、「教育に新聞を」の活動普及のことで、子どもの学習意欲を高めるために、新聞を教材に取り入れ、読む、調べる、表現するなどの能力を養うための新しい教育手段。

ニュービジネスの動向

このコーナーは、新しく立ち上がった、もしくは企画段階にある新発想のビジネスの動向についてのインタビューによる紹介です。

京都試作ネット

デジタルマイスターによる「試作加工のプロ集団」
～守ってきたのは感性、変えてきたのは先端技術～

「京都試作ネット」は、2年前に機械金属系の中小企業10社が共同で立ち上げた「試作に特化したソリューション提供サービス」を専門とするサイトで、「試作品製作のプラットフォーム」をインターネット上で運営しています。

「顧客の思いを素早く形に変える」をコンセプトに、試作品製作請負、ソフト開発、装置製作など、要望に応じて、試作単品加工からシステム・装置開発までフルセットで迅速に対応しており、「スピード対応、フルセット受注、シンプル発注」を特色としています。

様々な展示会に参加・出展し、雑誌や新聞に取り上げられるなど活発な活動を続けており、昨年はインターンシップを受け入れたり、大学と連携し、開発に取り組んだりと産学連携にも力を入れています。今回は事業代表の鈴木三朗さんにお話を伺いました。

成功につながった要因は？

ビジネス面でいうと、「試作」に絞っているということです。単なる共同受注では、利用者側に特色がはっきり分かりにくいと考えて、我々は、自分たちの得意分野を生かし、「試作」ということに絞り込みました。先陣を切るため、システムとしては不完全なままのスタートでしたが、問題が出てきても走りながら解決すればいいと考えました。十分な準備ができるのを待っていたのでは遅いと思ったのです。

組織面でいうと、現在のメンバーはお互い20年程の付き合いがあり、設立時には既に信頼関係が確実にできていました。ITのネットワークの前にヒューマンとしてのネットワ



<http://kyoto-shisaku.com/>



事業代表 鈴木三朗さん

ークが下地にあったということです。議論を繰り返し、思いや考えをしっかりと言葉に変えていくことで、共通の理念、ビジョンがはっきりとしていました。

「試作」と京都

京都が長い間都市として機能してきた中に、文化、空気といった言葉で表現しづらい何かがあると思います。我々が携わる「ものづくり」の場合は、職人が培ってきた「感性」というものだと思います。それは受け継いでいかなければならないものです。

「感性」は守りつつ技術は先端のものでなければなりません。ビジネスは新しい価値を生まなければ成り立ちません。大学と連携し取り組むことも有効です。新たな知が加わると、そこにビジネスが生まれます。以前は、大学は大学、企業は企業で知と技がバラバラなことが多く、共同での取組は有名大学と大企業という構図でしたが、今は違います。京都は大学が多く、若者の多い都市です。様々な発想を形にする技があれば、そこから何か生まれます。多くの可能性を秘めた都市だと思います。

「ものづくり」でも、大量生産の

ものづくりは京都には適しません。京都には様々な産業が集積しており、多様性があります。様々な要素が必要とされる「試作」という「ものづくり」は京都に適しています。また、京都の人は単一志向が強く、個性を大切にするという点からも適していると思います。京都を試作の集積地にしたいと考えています。

オール京都

集積することで価値が生まれます。多様な情報が行き交う場が必要であり、プラットフォームをつくることで、情報、人、技術など様々なものが集まります。「京都試作ネット」は「ものづくり」のテーブルをつくったと思っています。現在、機械金属系の企業10社で活動していますが、様々な業種の方々と取組も考えています。自然発生的に集まり、勉強してきた10社なので、拡大するにはパワーが必要です。今までに経験のないことをする場合、何が正解か誰にも分かりませんし、リスクも伴います。しかし、自分たちがまいた種で、次世代が実りを得ることができればと思います。近い将来、「京都試作ネット」の活動を、オール京都で取り組みたいと考えています。

私と京都



京都大学名誉教授
異 和夫

統廃合小学校 大学化構想

京都の中心市街地の人口が減少し地域の活力が低下しています。その象徴が都心の十数校にも及ぶ小学校の統廃合ではないでしょうか。京都の小学校は、明治初期わが国に小学校制度が創設されたのに先駆けて、地元住民の熱い想いを結集して開校されたのでした。それだけに建築的にみても立派なものも多く、統廃合への地元の抵抗も大きいのです。

わたくしはかねてから、この統廃合小学校を「大学」に生れ変わらせ

たらどうか、と提唱しています。これこそ京都の中心市街地の飛躍的な再生につながると考えているのです。

これまで「大学」というと、閉鎖的な大規模キャンパスのイメージでした。この新構想では、ひとつの旧小学校をひとつの学部に変換し、都心部にサテライト状に散在する複数の学部のネットワークをもって「大学」とするのです。まさに、まちなかに展開された大学です。各学部はそれぞれ地元の校区住民や町内会との関係を密接にして、旧小学校時代と同様に、「われらが大学・学部」という意識を持って、他学部とも張り合いながら育てて頂きたいのです。大勢の学生や先生が学区内で活動し居住することで生まれる経済・社会・文化的な利益は、ずいぶん大きいはずです。

今日、全国に大学数は非常に多くなり、むしろ過剰な状態にあるともいえます。そうした中で新しい大学は、京都の特性を存分に発揮するとともに現代社会のニーズに高度に応えるユニークな構想を持たなければなりません。そこで、京都にある既存大学がすでに手厚く担っている分野を除いて、例えば次のようなテーマで創造的役割を果たしたらどうでしょうか。

- ①住まい・まちづくり学：京都は住まい・まちづくりに優れた伝統を持つとともに、先進的な施策が行われています。
- ②芸能学：歌舞伎、能楽、舞踊など、日本の伝統芸能の中心地としての特質を発揮するとともに、一般芸能への拡張を図ります。
- ③映像学：京都は映画の発祥の地です。その基盤を生かして現代の多様な映像メディアへの展開を行います。
- ④宗教学：京都は仏教諸宗派の大本山を持ち、きわめて数多い寺院を擁しています。哲学の中心地でもありました。
- ⑤文化財学：文化財は質・量ともに全国をリードしていることはいまでもありません。研究・教育環境も抜群です。

統廃合小学校の利用は既に進行しており、いくつかは地域施設などに利用されていますが、まだこの問題は最終的に決着したとはいえません。小学校から大学への転換は問題が少なく、地元を受け入れられ易いのではないのでしょうか。もし将来、人口が増加し小学生が増えるようなら、小学校を併設すれば容易に解決できるでしょう。

《センター解説アワー》

▶ 子育て支援とまちづくり

このところ子育てサークルや子育てサロン開設のニュースをよく耳にします。商店街の空き店舗を利用したり、公民館で実施したりと、ふらりと立ち寄れる場所で行われることが多いようです。子育て期のお母さん、とりわけ子育てがはじめての場合、ちょっとしたことで悩むもの。おばあちゃん、おじいちゃんと同居していたり、近所に同じ世代のお母さんが多ければ相談できますが、最

近は相談できる相手を探すのがひと苦労。子育てサークルなら同じ悩みを抱えたものどうし、話も合うし先輩のアドバイスを聞けたりするのも人気のようです。子どもの友達づくりはもちろん、親の仲間づくりが大切なんですね。

地域のまちづくりを考えると、このような子育て支援の視点を取り入れてみるのはいかがでしょうか？小さい子を連れて行くと、歩いて行け

る範囲に気軽に立ち寄れる場所があるとうれしいもの。地域の中にそんな場所をつくることにより、若いお母さんたち（もちろんお父さんたちも！）が、子育てをきっかけに地域と関係を持つようになれば、まちづくりの活動にも参加しやすくなるのではないのでしょうか。まちづくりとは多くの人参加があってこそ。若い世代の地域デビューを、子育て支援で図ってみましょう。

センター語録

今年の5月から景観・まちづくりセンターに勤務しております。景観・まちづくりセンターの存在は、知っていましたが、具体的にどんな業務をしているのかというのは、こちらへ来てみるまではよくわかりませんでした。想像していた以上に地域密着型で、人と人とのつながりが大切であり、お互いの信頼関係で成り立っているところが多いと感じました。センター内の業務についても、まだまだよく分からないところがありますが、それ以上に苦労したのは、センターへ来られる方や、電話をかけてこられる方が、まず誰がよく分からないことです。最近では、だいぶんどの地域の方だとか、どのような活動をされている方などと、少しは分かってきましたが、まだまだ皆さんにご迷惑をお掛けして申し訳なく思っております。また、勤務時間も

初めて経験する2交代の変則勤務で、センター内でも十分連絡体制を整備しておりますが、連絡していただいたときに不在であるなど、少しデメリットと感じる部分もあります。しかし、夜間・休日等にセンター業務が拡大されるなど、大きなメリットもあると思いますので、今までとは少し違ったセンターのご利用をしていただいたら面白いし、かつ有効であると思います。まだ、移転して間もないということもあり、不慣れな面もありますが、今年度、センターも新施設の移転と同時に新規スタッフも入り、業務を充実させていく方向ですので、どしどしご要望・ご相談をいただきたいと思っております。たくさんの方々のご来館をお待ちしております。

(景観・まちづくりセンター事務局 Y・S)

京まちコーポno.9



センターからのお知らせ

京都市景観・まちづくりセンターホームページ

<http://machi.hitomachi-kyoto.jp>

センターの取組内容をはじめ、まちづくりに関する様々な情報を発信するホームページ。

皆さんの地域のイベント情報、まちづくり情報も掲載します。メールマガジンの登録も受付中です。



センター活動の新拠点のご案内

京都市景観・まちづくりセンター

〒600-8127 京都市下京区西木屋町通上ノ口上る梅湊町83番地の1 (河原町五条下る東側)
 「ひと・まち交流館 京都」地下1階
 TEL 075-354-8701
 FAX 075-354-8704
 e-mail : machi.info@hitomachi-kyoto.jp

- 開館日 (相談の受付等)
 9:00 ~ 21:30 (月曜日~土曜日)
 9:00 ~ 17:00 (日曜日・祝日)

- 休館日
 毎月第3火曜日 (国民の祝日にあたるときは翌日)
 年末年始 (12月29日~1月4日)
 なお、センターへのお越しの際は公共交通機関をご利用ください。



賛助会員の募集 (平成15年度分)

平成15年度の賛助会員を募集しています。

京都のまちづくりに貢献したい！センターの活動を応援したい！そんなあなたの熱意をお待ちしています。

[特典]

- ・ニュースレター (年4回・季刊) の送付
- ・冊子等センター発行物の割引
- ・ニュースレターでの活動紹介
- ・シンポジウム、セミナー等への優待

[年会費]

個人1口:5千円 団体1口:5万円

まちづくりフレンズの募集

地域のまちづくりに関する各種イベントや啓発・学習活動にボランティア・スタッフとして参加していただける方を募集・登録しています。